

研究

現代の子どもの発達の特徴とその加齢に伴う変化

— 1983年および2001年のK式発達検査の標準化資料の
比較による検討Ⅱ —

郷 間 英 世

〔論文要旨〕

1980年公刊の「新版K式発達検査」と、2002年公刊の「新版K式発達検査2001」の標準化資料の項目別50%通過年齢を比較し、現代の子どもの発達の特徴を検討した。その結果、乳児期では50%通過年齢の小さくなった、すなわち20年前に比べ発達の促進している項目が62.8%、50%通過年齢の大きくなった、すなわち発達の遅延した項目が33.7%であったが、加齢とともに変化し、発達の遅延した項目は幼児期前半51.0%、幼児期後半89.7%と増加し、学齢期もこの傾向が持続してみられた。領域別にみると、言語・社会領域では幼児期前半に、認知・適応領域では幼児期後半から遅延する項目の増加が著明となった。これらの最近の子どもの発達の20年前に比べた変化は、注目すべき、また緊急に検討、対応すべき課題と考えられた。

Key words : 現代の子ども、発達、新版K式発達検査、発達遅延

I. 目 的

われわれはこれまで、1980年の公刊の後1983年に増補された「新版K式発達検査」(以下「新K式1983」と略する)¹⁾と、2002年に公刊された「新版K式発達検査2001」(以下「新K式2001」と略する)²⁾³⁾の標準化のために集められた資料を用いて、現代の子どもたちの発達の特徴について検討している。「新版K式発達検査」は、医療機関、児童相談所、保健所等で子どもの発達の評価や診断に広く利用され、また未熟児のフォローアップ研究会のプロトコールの中で幼児期の発達評価にも利用されている⁴⁾ものである。前回の幼児の資料を用いた検討⁵⁾の結果、現代の幼児は20年前に比べて、1) 発達が促進している項目に比べて、発達の遅延している項目が多い、すなわち現代の幼児は発達が遅く

なっていること、2) 遅れてきている内容では、特に「描画」に属する項目が顕著であり、「正方形模写」では獲得年齢が20年前に比べて約6か月、「三角形模写」では約8か月遅れてきていること、3) 発達の促進している項目数は少ないながらも、「色の名称4/4」では約9か月早くなっていることなどを報告した。

そこで今回は、幼児期に加え乳児期、学齢期の資料もあわせて検討し、現代の子どもの発達の特徴、すなわち20年前の子どもとの発達の相違が小児期のいつから始まり、どの年代まで持続するのかを検討したので報告する。

Ⅱ. 方 法

「新K式1983」および「新K式2001」の標準化に用いられた資料のうち、各検査項目の50%通過年齢の値を検討した。「新K式1983」の標

Developmental Features of Present-day Children in Japan

[1731]

Hideyo GOMA

奈良教育大学障害児教育(研究職/小児科医) 京都K式発達研究会

別刷請求先: 郷間英世 奈良教育大学障害児教育 〒630-8528 奈良県奈良市高畑町

Tel/Fax: 0742-27-9252 E-mail: goma@nara-edu.ac.jp

受付 05. 5. 25

採用 06. 1. 17

準化の被験者は0歳から13歳までの1,562人であり、「新K式2001」の被験者は0歳から成人までの2,677人で、そのうち13歳以上の498人を除くと2,179人になる。両検査の13歳までの各年齢区分の人数を表1に示したが、明らかな障害を有するものは含まれていない。「新K式1983」も「新K式2001」も検査項目は、大きく3つの領域に分かれている。すなわち姿勢・運動、認知・適応、言語・社会である。検査項目数は、「新K式1983」では領域ごとに62, 161, 98項目で参考項目3を加え計324項目、「新K式2001」では52, 165, 111項目、計328項目である。そのうち、「新K式1983」では乳児期早期の被験者が少ないことを考慮し、50%通過率が5か月以下の項目を分析の対象から除き、両検査共通の項目で、評価基準がほぼ同一の項目、姿勢運動30項目(表2)、認知適応119項目(表3)、言語社会57項目(表4)、計206項目の50%通過年齢を分析の対象とした。

50%通過年齢とは、それぞれの項目を50%の子どもが通過できる(課題に合格する)と算出された生活年齢のことである。50%通過年齢の算出には以下の方法によった。まず、検査項目ごとに、どの年齢区分で、標準化集団のうち何%の者がその項目を通過しているかを算出する。これを年齢別通過率という。次いで、項目ごとに通過率が50%となる生活年齢を推定した。計算は、年齢別通過率に基づいて生活年齢を横座標、通過率を縦座標とする通過率曲線を作成、通過率曲線は理論上累積正規分布曲線に従うものと仮定し、通過率50%に対応する生活年齢を50%通過年齢として読みとった¹³⁾。

分析方法として、各項目における「新K式1983」と「新K式2001」の50%通過年齢の値の比較は、「新K式1983」の通過年齢をA、「新K式2001」の通過年齢をBとして、式「変化率(%) = (B - A) / A × 100」⁶⁾より求め、10%以上を差が大であると考えた。

なお、分析の際に50%通過年齢の検討対象項目を、1983年の値をもとに、①乳児期(12か月未満)86項目、②幼児期前半(12か月～3歳)51項目、③幼児期後半(3歳～6歳)39項目、④学齢期(6歳～13歳)30項目の4つに分けた。そして、領域ごとに年代ごとの特徴を検討した。

表1 新K式1983および新K式2001の13歳までの被検査者人数

年齢区分(年:月)	新K式1983	新K式2001
超～以下		
0:00～0:01	0	67
0:01～0:02	3	68
0:02～0:03	12	39
0:03～0:04	88	45
0:04～0:05	64	43
0:05～0:06	53	45
0:06～0:07	55	39
0:07～0:08	78	44
0:08～0:09	40	66
0:09～0:10	43	43
0:10～0:11	36	43
0:11～1:00	54	52
1:00～1:03	79	71
1:03～1:06	70	57
1:06～1:09	50	61
1:09～2:00	46	48
2:00～2:03	60	58
2:03～2:06		50
2:06～3:00	57	76
3:00～3:06	82	100
3:06～4:00	51	100
4:00～4:06	55	97
4:06～5:00	68	88
5:00～5:06	90	93
5:06～6:00	40	96
6:00～6:06	53	110
6:06～7:00	61	71
7:00～8:00	79	115
8:00～9:00		65
9:00～10:00	45	56
10:00～11:00		62
11:00～12:00	50	55
12:00～13:00		56

表2 姿勢・運動項目の50%通過年齢（月）

項 目 名	50%通過年齢（月）		変化率（%）
	新K式1983	新K式2001	$(B-A)/A \times 100$
手つき座る	5.6	5.0	△10.7
体重を支える	5.7	5.0	△12.3
寝返り	5.9	4.7	△20.3
脚ではねる	6.2	6.4	3.2
手で頭の布を除く	6.5	6.4	△ 1.5
両手支持で立つ	6.6	6.0	△ 9.1
身体を起す	6.7	6.3	△ 6.0
方向転換	6.8	6.2	△ 8.8
足を口へ	7.5	6.5	△13.3
横や後ろ取れる	7.5	7.2	△ 4.0
つかまらせ立ち	8.1	7.8	△ 3.7
腹臥になる	8.3	7.5	△ 9.6
片手立ち 玩具	9.0	8.3	△ 7.8
四つ這い	9.2	8.6	△ 6.5
つかまり立ち上がる	9.4	8.6	△ 8.5
つたい歩き	9.5	9.4	△ 1.1
座位となる	9.7	8.4	△13.4
座る	9.8	8.7	△11.2
支え歩き 両手	10.0	9.3	△ 7.0
支え歩き 片手	11.9	11.8	△ 0.8
一人立ち	12.0	11.2	△ 6.7
這い登る	12.4	10.7	△13.7
歩く 2・3歩	13.3	12.4	△ 6.8
片手支持登る	15.2	14.6	△ 3.9
片手支持降りる	16.1	15.3	△ 5.0
手すりで投降	18.8	18.6	△ 1.1
両足跳び	22.9	23.6	3.1
飛び降り	26.0	24.7	△ 5.0
交互に足を出す	30.6	32.0	4.6
ケンケン	38.0	40.2	5.8

変化率△はマイナスを表す

表3 認知・適応項目の50%通過年齢(月)

項 目 名	50%通過年齢(月)		変化率(%) (B-A)/A ×100	項 目 名	50%通過年齢(月)		変化率(%) (B-A)/A ×100
	新K式 1983	新K式 2001			新K式 1983	新K式 2001	
両手を近寄せる	5.1	5.1	0.0	予視的追視	15.9	15.2	△4.4
顔を向ける	5.1	4.0	△21.6	入れ子3個	17.3	18.6	7.5
玩具(車)の追視	5.1	3.9	△23.5	はめ板 全 例無	17.8	17.8	0.0
手で顔の布を除く	5.5	5.2	△5.5	積み木の塔 5	18.2	18.3	0.5
両手で振り鳴らす	5.6	5.7	1.8	2個のコップ 2/3	18.2	16.5	△9.3
両手に保持10秒	5.6	4.7	△16.1	角板例後 1/3	18.3	18.3	0.0
拇指先把握	5.8	6.2	6.9	3個のコップ 2/3	19.2	18.8	△2.1
第3提示 落とさぬ	5.9	6.1	3.4	はめ板 回転 全 1/4	19.8	19.8	0.0
空いた手を伸ばす	5.9	5.8	△1.7	円錐画 模倣	20.0	20.2	1.0
瓶に手を出す	6.0	5.6	△6.7	積み木の塔 6	20.3	20.2	△0.5
柄を持つ	6.1	5.6	△8.2	形の弁別 I 1/5	22.4	21.1	△5.8
両手に持つ	6.3	5.9	△6.3	角板例前 1/3	22.8	22.6	△0.9
持ち上げる	6.3	6.2	△1.6	形の弁別 3/5	24.7	22.5	△8.9
とにかく引き寄せる	6.3	6.4	1.6	横線模倣 1/3	24.8	26.1	5.2
持ちかえ	6.4	7.4	15.6	縦線模倣 1/3	24.9	27.2	9.2
部分隠し	6.4	6.6	3.1	積み木の塔 8	25.1	23.7	△5.6
熊手状かき寄せ	6.5	6.0	△7.7	折り紙 I	27.3	29.5	8.1
机に打ちつける	6.7	7.0	4.5	入れ子5個	27.4	27.1	△1.1
片手を近寄せる	6.8	6.1	△10.3	トラックの模倣	28.0	29.5	5.4
振り鳴らす	6.8	7.6	11.8	記憶板 2/3	28.0	26.6	△5.0
コップを見る	6.9	5.6	△18.8	形の弁別 II 8/10	30.0	30.8	2.7
鉄杖把握 試みる	6.9	7.7	11.6	円模写 1/3	30.7	33.0	7.5
輪と紐で遊ぶ	7.0	8.0	14.3	折り紙 II	31.6	34.0	7.6
輪へ伸ばす	7.1	6.0	△15.5	家の模倣	31.7	34.1	7.6
拇指側かき寄せ	7.2	7.4	2.8	十字模写 例後 1/3	34.9	36.1	3.4
コップに触る	7.5	6.1	△18.7	四角構成 例後 2/2	35.8	36.7	2.5
すぐ輪を引き寄せる	7.5	8.7	16.0	折り紙 III	37.6	40.9	8.8
第2積木を叩く	7.9	8.3	5.1	十字模写 例前 1/3	38.3	40.8	6.5
鉄杖把握	8.1	8.5	4.9	形の弁別 II 10/10	38.5	39.8	3.4
中の積木に触れる	8.3	8.2	△1.2	門の模倣 例後	39.5	42.2	6.8
示指を近付ける	8.3	7.9	△4.8	重さの比較 例後 2/2	41.3	43.1	4.4
積木を置く	8.4	9.6	14.3	門の模倣 例前	45.3	48.0	6.0
積木と積木	8.6	9.0	4.7	重さの比較 例前 2/2	45.3	46.6	2.9
全体隠し	8.6	8.0	△7.0	積木叩き 2/12	45.3	45.6	0.7
円板をはさず	8.7	8.1	△6.9	四角構成 例前 2/3	45.8	49.4	7.9
中の積木を出す	8.8	8.6	△2.3	正方形模写 1/3	46.7	52.6	12.6
釘抜状把握不完全	9.0	9.9	10.0	積木叩き 3/12	49.5	49.8	0.6
コップに入れる 例後	9.2	10.3	12.0	模様構成 I 2/5	50.6	52.4	3.6
小鈴に手を出す	9.2	8.1	△12.0	積木叩き 4/12	51.9	54.9	5.8
柄先から持つ	9.6	9.3	△3.1	三角形模写 1/3	56.1	64.0	14.1
小鈴を取る	9.7	8.1	△16.5	模様構成 I 1/5	57.9	59.5	2.8
順に遊ぶ	9.9	9.2	△7.1	積木叩き 5/12	59.7	62.8	5.2
コップの上に出す	10.1	9.5	△5.9	階段の再生	60.0	62.7	4.5
鎌舌に触る	10.2	10.8	5.9	模様構成 I 3/5	62.8	65.9	4.9
釘抜状把握	10.6	11.5	8.5	模様構成 I 4/5	67.6	69.9	3.4
入れようとする	10.6	10.7	0.9	積木叩き 6/12	68.1	69.8	2.5
コップに入れる 例前	11.0	11.6	5.5	菱形模写 2/3	74.9	86.8	15.9
瓶に入れる 例後	11.2	11.1	△0.9	模様構成 II 1/3	77.2	79.2	2.6
瓶に入れる 例前	11.4	12.0	5.3	積木叩き 7/12	85.7	86.3	0.7
紐で下げる	11.6	11.6	0.0	5個のおもり 2/3	86.1	91.0	5.7
積もうとする	11.7	11.6	△0.9	模様構成 II 2/3	97.6	93.2	△4.5
なぐり描き例後	11.8	11.6	△1.7	積木叩き 8/12	98.5	111.4	13.1
円板をはめる	11.9	11.6	△2.5	図形記憶 1/2	102.1	101.1	△1.0
なぐり描き例前	13.1	12.6	△3.8	模様構成 II 3/3	116.7	122.5	5.0
丸棒 例後 1/3	13.3	13.5	1.5	積木叩き 9/12	122.7	140.6	14.6
積み木の塔 2	13.8	13.8	0.0	図形記憶 1.5/2	124.4	118.6	△4.7
包み込む	14.7	13.7	△6.8	帰納(紙切)	128.6	133.3	3.7
瓶から出す	14.8	13.6	△8.1	図形記憶 2/2	134.9	147.2	9.1
円盤回転	15.4	15.6	1.3	紙切 I	137.8	149.5	8.5
積み木の塔 3	15.5	15.5	0.0				

変化率△はマイナスを表す

表4 言語・社会項目の50%通過年齢

項目名	50%通過年齢(月)		変化率(%) (B-A)/A×100
	新K式1983	新K式2001	
「イナイナイバー」	5.5	4.8	△12.7
取ろうとする	5.6	4.8	△14.3
自像に発声	5.9	6.3	6.8
自像に触る	5.9	6.4	8.5
払い落とす	6.2	6.0	△3.2
人見知り	7.9	7.3	△7.6
喃語	8.4	7.8	△7.1
「バイ・バイ」	9.4	9.8	4.3
「メンメ」	9.4	9.0	△4.3
指差しに反応	10.2	9.8	△3.9
ボールを押し付ける	10.9	11.5	5.5
「チョウダイ」渡す	10.9	10.9	0.0
検者とボール遊び	11.5	11.8	2.6
指さし行動	12.2	12.3	0.8
語彙3語	15.3	16.0	4.6
絵指示 4/6	18.7	19.1	2.1
身体各部 3/4	19.5	21.7	11.3
2数復唱 1/3	26.4	27.7	4.9
大小比較 3/3 5/6	27.7	28.6	3.2
長短比較 3/3 5/6	30.9	32.5	5.2
3数復唱 1/3	31.1	32.4	4.2
姓名	31.9	33.4	4.7
性の区別	34.6	36.0	4.0
短文復唱Ⅰ 1/3	37.9	39.0	2.9
4つの積木 1/3	39.2	39.4	0.5
色の名称 3/4	41.3	34.7	△16.0
数遊び 3	43.5	45.6	4.8
13の丸10まで	46.2	44.7	△3.2
左右弁別 全逆 3/3 5/6	48.1	53.0	10.2
数遊び 4	48.1	50.9	5.8
色の名称 4/4	48.3	39.0	△19.3
13の丸 全 1/2	49.6	49.2	△0.8
数遊び 6	52.8	56.0	6.1
指の数左右	53.4	55.6	4.1
5以下加算 2/3	54.0	58.5	8.3
数遊び 8	55.8	56.9	2.0
指の数左右全	57.4	59.7	4.0
硬貨の名称 3/4	57.6	63.7	10.6
5以下加算 3/3	60.7	65.8	8.4
左右弁別 全正 3/3 5/6	61.0	66.5	9.0
打数数え 3/3	73.5	74.2	1.0
日時 3/4	77.3	80.4	4.0
短文復唱Ⅱ 1/3	77.9	79.5	2.1
20からの逆順	81.1	81.8	0.9
書き取り	86.9	94.4	8.6
釣銭 2/3	89.4	94.3	5.5
文章整理 1/2	90.9	86.0	△5.4
日時 4/4	95.8	96.6	0.8
語の類似 2/3	96.4	103.0	6.8
三語一文 2/3	96.9	92.1	△5.0
文章整理 2/2	109.3	104.0	△4.8
8つの記憶	117.7	106.3	△9.7
反対語 3/5	134.5	107.4	△20.1
3語類似 2/4	134.9	138.8	2.9
名詞列挙	136.3	149.6	9.8
閉ざされた箱 3/4	139.3	146.2	5.0
反対語 4/5	145.6	143.8	△1.2

変化率△はマイナスを表す

また、同領域の同じ分類に属するいくつかの項目について加齢に伴う変化を検討した。

Ⅲ. 結 果

1) 発達の全体的な傾向

各項目の50%通過年齢を領域別に表2～表4に示した。全207項目のうち、50%通過年齢の小さくなったのは87項目、大きくなった項目は111項目、変化なかったものは8項目であった。年代別の特徴を図1に示したが、50%通過年齢の小さくなった、すなわち発達の促進している項目が乳児期で62.8% (54項目)と多かったが、幼児期前半39.2% (20項目)、幼児期後半10.3% (4項目)と減少し、学齢期は30% (9項目)とやや増加した。50%通過年齢の大きくなった、すなわち発達の遅延した項目は乳児期の33.7% (29項目)から、幼児期前半51.0% (26項目)、幼児期後半89.7% (35項目)と増加し、学齢期では70% (21項目)とわずかに減少した。

50%通過年齢で10%以上促進した項目は、姿勢・運動領域の項目では「手つき座る」、「体重を支える」、「寝返り」、「足を口へ」、「座位となる」、「座る」、「這い登る」ですべて13か月未満の課題であった。認知・適応領域では「顔を向ける」、「玩具(車)の追視」、「両手に保持10秒」、「片手を近寄せる」、「コップを見る」、「輪へ伸ばす」、「コップに触る」、「小鈴に手を出す」、「小鈴を取る」ですべて乳児期の課題であった。言語・社会領域では「イナイナイバー」、「取ろうとする」が乳児向けの課題、それ以上の年齢の課題は「色の名称3/4」、「色の名称4/4」の「色の名称」に分類される項目、および「反対語3/5」であった。逆に、10%以上遅延した項目は、姿勢・運動領域にはなく、認知・適応領域では「持

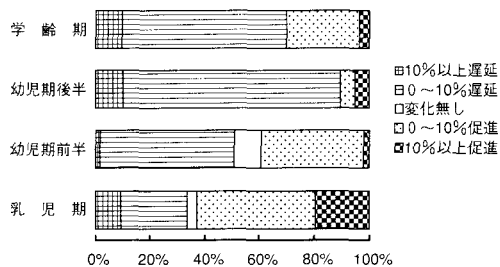


図1 新K式2001と新K式1983の50%通過年齢の比較

ちかえ」、「振り鳴らす」、「鉄状把握、試みる」、「輪と紐で遊ぶ」、「すぐ輪を引き寄せる」、「積木を置く」、「釘抜き状把握不完全」、「コップに入れる例後」が乳児期の項目で、幼児期以上の課題は「正方形模写」、「三角形模写」、「菱形模写」の「描画」に分類される項目と「積木叩き8/12」、「積木叩き9/12」の「積木叩き」に分類される項目であった。言語・社会領域では「身体各部3/4」、「硬貨の名称3/4」、「左右弁別、全逆3/3, 5/6」でいずれも幼児期の課題であった。

2) 領域別にみた発達の年代ごとの変化

項目を、領域別に年代別に分けた結果を図2～4に示した。姿勢・運動領域では、乳児期は発達が促進している項目が90%以上であるが、幼児期になると減少する。認知・適応領域では、乳児期と幼児期前半では発達の促進している項

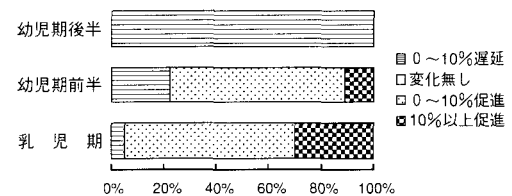


図2 姿勢・運動領域の項目の50%通過年齢

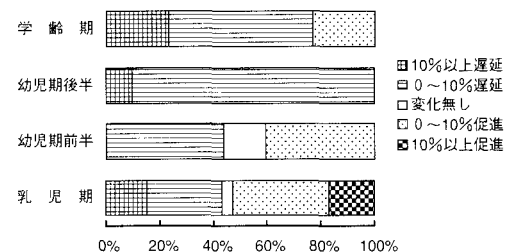


図3 認知・適応領域の項目の50%通過年齢

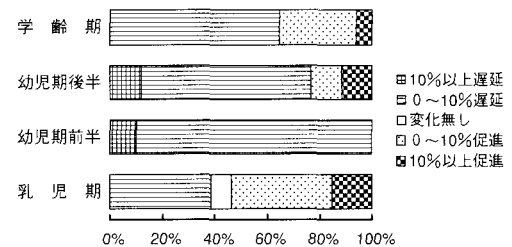


図4 言語・社会領域の項目の50%通過年齢

目と遅延している項目が同じような割合であるが、幼児期後半になると発達の促進している項目がなくなり、すべて遅延している項目となった。しかし、学齢期には促進している項目もわずかに出てくる。言語・社会領域では、乳児期では促進している項目が遅延している項目に対してわずかに多いが、幼児期前半にはすべて遅延している項目になる。そして、幼児期後半から発達の促進している項目が再び見られるようになり、この傾向は学齢期も持続する。

3) 同領域の同じ分類に属する項目の発達の变化

幼児期以後で、同領域で同じ分類に含まれる項目のうち、10%以上変化したものが複数あるものについて分類別に検討した。

認知・適応領域の項目で10%以上の変化を認めた「正方形模写」、「三角形模写」、「菱形模写」の3項目は「描画」に分類されている。「描画」に分類される項目は、「新K式1983」に比べ、「新K式2001」で、50%通過年齢が高くなっているものが多い。そこで、描画に分類されている全11項目について、50%通過年齢を図5に示した。その結果、50%通過年齢は、低年齢向きの項目のうちはそれほど差を認めないが、「正方形模写」よりも「三角形模写」、そして「菱形模写」では12か月近くも発達が遅延するという、幼児

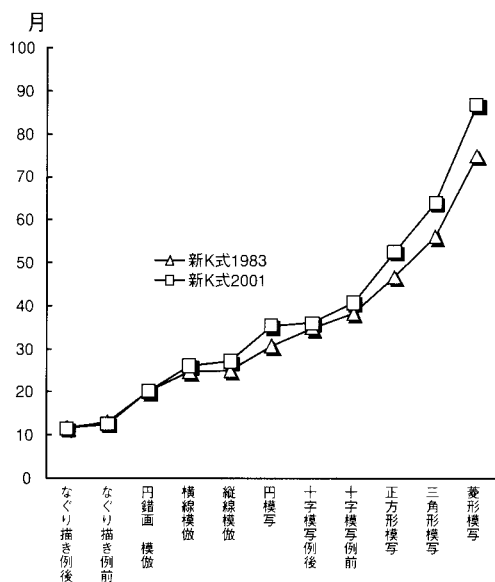


図5 描画の項目の項目別50%通過年齢

期後半以後の項目で変化率が大きくなるという傾向が認められた。

「積木叩き」に分類される「積木叩き8/12」、「積木叩き9/12」でも10%以上の変化を認めた。「積木叩き」は一連の課題で描画の項目と同じく認知・適応領域に属する。すべての「積木叩き」の結果を図6に示したが、この項目では幼児期には差がなく、学齢期になってから差が大きくなっている。

言語・社会領域の項目のうち、「色の名称3/4」、「色の名称4/4」の2項目は、「色の名称」に分類されている。しかも発達が早くなった項目である。そこで、50%通過年齢および、変化率を図7に示したが、課題が難しいほうが変化率が大きかった。

IV. 考 察

本研究で年代ごとに検討した結果、現代の子どもの発達は20年前の子どもに比べて変化していることが明らかになった。すなわち、乳児期は促進している項目が多いのに対して、幼児期には乳児期とは逆に遅延している項目が多くな

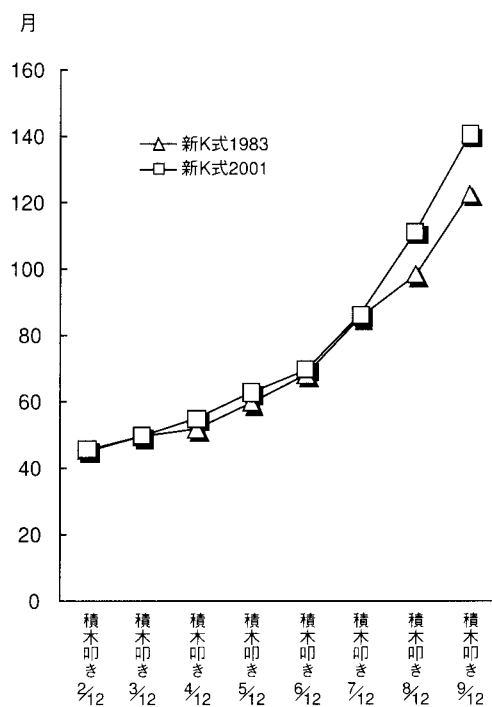


図6 積木叩きの項目別50%通過年齢

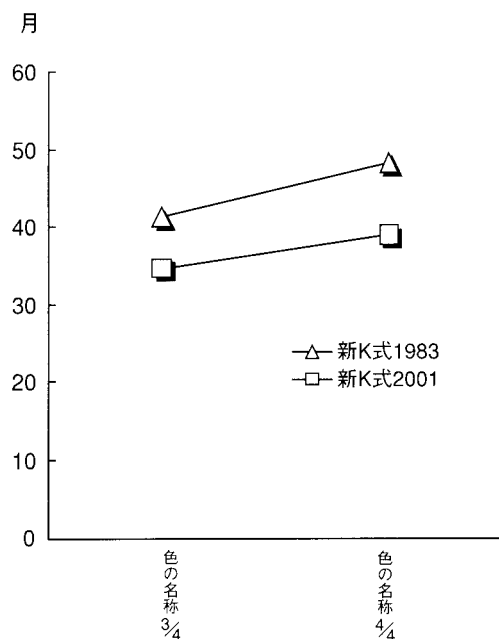


図7 色の名称の項目別50%通過年齢

り、この傾向は学齢期も持続するというものである。領域別にみると、姿勢・運動領域では、乳児期の発達は20年前に比べ促進傾向にあるが、その促進は次第に軽減し幼児期後半にはなくなる。認知・適応領域では20年前に比べ、幼児期後半から発達の遅延傾向が著明に認められ、学齢期も持続する。この領域の中で特に遅れが著明な「描画」や「積木叩き」に分類される項目では、加齢とともに遅れが強くなる。言語・社会領域では、幼児期前半に発達の遅延傾向が強く現れ、幼児期後半からは軽減するものの持続する。またこの領域の中には「色の名称」のように発達の促進が継続してみられるものもある。以上の結果を現代の子どもの年代別領域

別の発達の20年前との比較として表5にまとめた。

このように、子どもの発達はこの20年の間にその様相を変えつつある。これまで発達に関しては、最近の幼児教育の進歩や教育用具などの普及により、一般には次第に速くなっていると考えられていたと思われる。しかし、本検討の結果は幼児期の発達は20年前に比べて遅延傾向にあるという、それとは逆のものであった。現代は、発達の促進や発達加速現象といわれていた時代から、発達の遅延する時代へと変化しているといえよう。このような子どもの発達が遅延してきているという報告は、以前はほとんどみられなかった。しかし、小枝ら^{7,8)}は、鳥取県の5,335人の3歳児を対象に発達に関する項目の通過率を10年前および20年前と比較検討し、運動発達、社会性、身辺自立、言語発達とも、経年的に低下してきていると報告している。そしてその原因として、家庭の教育力の低下、母親の子育ての不備、テレビやテレビゲームの影響などをあげているが明らかではないとしている。また、秋山ら⁹⁾は1997年に東京都三鷹市において、乳幼児202人の発達を津守稲武式の発達質問紙で評価、1961, 1989年と比較し、多くの項目で、経年的に発達が遅れてきていると報告している。そして、この変化の背景には社会との関わりや生活習慣の変化が考えられると推測している。

このように、われわれの報告も含めて、ここ2, 3年各地で発達の変容についての検討がなされ、最近の子どもの幼児期の発達が遅延してきているという内容のものが見られることは、非常に注目すべきことと考えられる。また子どもたちの健やかな発達を願うわれわれにとっ

表5 現代の子どもの年代別領域別発達の20年前との比較

	乳児期	幼児期前半	幼児期後半	学齢期
姿勢・運動領域	促進	軽度促進		
認知・適応領域			遅延	遅延
言語・社会領域		遅延	軽度遅延 (一部促進)	軽度遅延 (一部促進)
全 領 域		軽度遅延	遅延 (一部促進)	遅延 (一部促進)

て、緊急に対応すべき課題と考えられる。

本研究の一部は第50回（2003年鹿児島）および52回（2005年山口）の日本小児保健学会にて発表した。また本論文の作成にあたり、京都K式研究会の松下裕氏（元神戸学院大学教授）と故生澤雅夫氏（大阪市立大学名誉教授）より貴重なご助言をいただいた。

文 献

- 1) 生澤雅夫, 松下 裕, 中瀬 淳, 編著. 新版K式発達検査法. 京都: ナカニシヤ出版, 1985.
- 2) 生澤雅夫, 松下 裕, 中瀬 淳, 編. 新版K式発達検査2001実施手引書. 京都: 京都国際社会福祉センター, 2002.
- 3) 生澤雅夫, 大久保純一郎. 「新版K式発達検査2001」再標準化関係資料集. 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」別冊, 2003: 21-63.
- 4) 三科 潤. 「ハイリスク児フォローアップ研究会」フォローアップ健診の手引き, 平成10年度厚生省こども家庭総合研究事業「周産期医療体制に対する研究」報告書, 1999.
- 5) 郷間英世. 現代の子どもの発達の特徴についての研究—1983年および2001年のK式発達検査の標準化データによる研究 I. 子ども学 (甲南女子大学国際子ども学研究センター). 2003; 第5号: 11-22.
- 6) 上田礼子, 古屋真由紀. 乳幼児の発達と地域の特徴. 民族衛生. 1978; 44(2): 68-73.
- 7) 小枝達也, 他. この20年間で乳幼児発達はどのように変化したか; 3歳児健診から. 小児保健学会講演集, 2003: 268-269.
- 8) 小枝達也, 発達支援と地域連携, 小児保健研究, 日本小児保健協会50周年記念特別増刊号, 2004; 63巻: 165-167.
- 9) 秋山千枝子, 他. 津守稲毛式による現代っ子の発達の特徴. 小児保健学会講演集, 2004: 202-205.